

フィリピンと日本の子どもたちを結ぶ大学生らのボランティア団体「サークルK芦屋」が26日、芦屋市立精道小学校（精道町）を訪れた。児童らと一緒に日本らしい模様をTシャツにあしらひ、9月にフィリピンへ持参。同じTシャツに今度はフィリピンの子どもたちと一緒に新たなデザインを加え、日比共同のオリジナル作品を仕上げる。

（竜門和諒）

友情の手作りTシャツ

「サークルK芦屋」は2014年に県立国際高校（芦屋市）の卒業生らが中心になって設立。国際奉仕団体「芦屋キワニスクラブ」の関連団体でもある。

サークルKは、「地域の子どもたちと世界の子どもたちの懸け橋になる」を掲げ、交流イベントを企画。芦屋市内の児童らが製作したTシャツをフィリピンに持参し、現地の子どもたちとともに完成させる。

サークルKの大学生や留学生ら6人が訪問。5年生約120人を前に、代表の森本小夏さん（22）＝関西学院大4年＝らがフィリピン・リザル市にある児童施設の紹介や、ごみ処理など国の課題を伝える出前授業。その後、児童

両国でデザイン加え交流

約40人と一緒に、計16枚のTシャツづくりに取り組んだ。

真っ白のTシャツに、多様な色のフェルトを使い、桜や富士山、風鈴など日本らしい模様を加えた。若槻紗来さん（10）は「作ったTシャツを見てもらって日本の文化を知ってほしい」と笑顔で話した。

Tシャツは9月、サークルKがリザル市の児童施設に持参し、今度はフィリピンの子どもたちと作業。バナナなどフィリピンらしい模様を加えて、オリジナルTシャツを完成させる。

日本とフィリピンで作業の様子を撮影した写真集を作るという、森本さんは「地域と世界の子どもがつながるきっかけをつくり、外国への壁をなくしたい」と話していた。

フィリピンと日本の子どもも 共同で

学生ボランティア「サークルK芦屋」計画

サークルK芦屋の留学生（奥）とともにTシャツに桜の飾りをあしらう児童ら＝芦屋市立精道小学校

